

経済セミナー

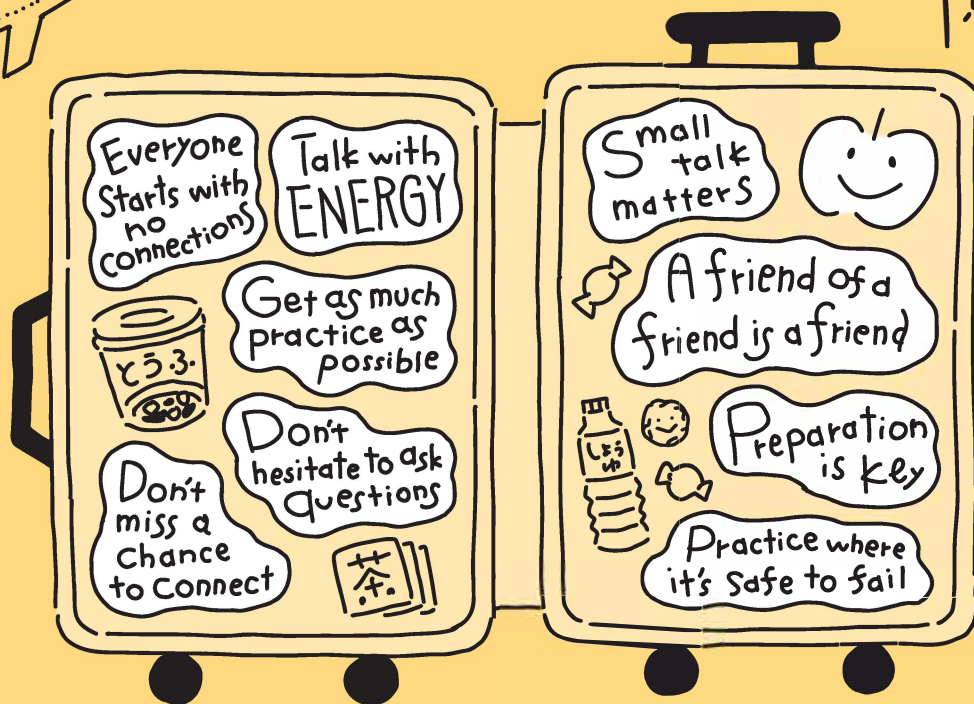
6・7
2026
No. 750
日本評論社

2026年7月1日発行（年6回奇数月の1日発行） 通巻750号 昭和32年4月18日 第3種郵便物認可 ISSN 0386-992X

THE KEIZAI SEMINAR

特集

国際学会、はじめの一歩を 踏み出すために



思いこって
いこう!!

特集

国際コンファレンスの歩き方 ～発表準備からネットワーキングまで～

- 気負わず、手の届く目標を立てて、まずは参加してみよう! / 重岡仁
- 場数を踏み、ネットワークを広げ、プレゼンに慣れる好循環を回そう! / 今井泰佑

国際学会にどう参加してきたか? ～場数がものを言い出すまで～ / 黒川博文

国際学会サバイバル記 ～猪突猛進編～ / 佐々木周作

新連載スタート! 取引仲介の経済学 / 渡辺誠

特別連続インタビュー 白川方明 元日銀総裁に聞く 日本銀行の制度と実務: これまでとこれから
第3回・日銀と大蔵省(財務省)の関係と円の国際化 / 白川方明×服部孝洋

CONTENTS

特集

5 国際学会、はじめの一步を 踏み出すために

- 6 国際コンファレンスの歩き方～発表準備からネットワーキングまで～/
重岡仁・今井泰佑・黒川博文(司会)
- 7 インTRODakション/黒川博文
- 8 気負わず、手の届く目標を立てて、まずは参加してみよう! /重岡仁
- 15 場数を踏み、ネットワークを広げ、プレゼンに慣れる好循環を回そう! /今井泰佑
- 19 Q&Aセッション
- 23 国際学会にどう参加してきたか? ～場数がものを言い出すまで～/黒川博文
- 29 国際学会サバイバル記～猪突猛進編～/佐々木周作

トピックス

- 35 第5回 日本経済学会女性研究者奨励賞(日本生命賞)
土地利用と管理による気候変動対応:所有者の利益と社会の利益のギャップを超えて
橋田夕紀子
- 46 『[AIと経済学]でもっとよくなる保育政策』出版記念イベント
「官民越境人材」と語る保育政策・行政の現場での専門知活用
深谷大一郎・竹浪良寛・森脇大輔
- 55 政策と学術研究の架け橋を目指して vol.4
自治体の現場から、データを駆使して政策に貢献する研究の道へ
松本広大
- 60 金融市場探訪の新しいスタンダード:服部孝洋『マネー・マーケット入門』
新発田龍史

経済セミナー

THE KEIZAI SEMINAR

6・7
2026
No.750

経セミ・追加情報の発信

本誌掲載記事の補足情報や、
その他参考情報などを、

「経済セミナー note」(<https://note.com/keisemi>)
にて公開しています。


本誌とあわせて、ぜひご利用ください。






表紙イラストについて

英語に苦手意識を持つ日本人は少なくない。外国人と会話するだけでも緊張する。それが英語
ネイティブも多い外国人の研究者たちを相手に、英語でプレゼンする国際学会や国際ワークショ
ップなら、なおさら恐ろしい。でも大丈夫。どんなエキスパートも最初は知り合いゼロ。失敗を重ねて
経験を積み、徐々に慣れてきたということが、本誌の特集でわかる。先輩たちが本誌で共有
してくれたアドバイスや豆知識をスーツケースに詰め込んで、はじめの一步を踏み出そう!

新連載

- 62 取引仲介の経済学 vol.1 [新連載] 渡辺誠 
なぜ仲介が必要か

連載

- 74 成長と衰退の経済史 vol.5 高島正憲 
暴力に担保された成長の芽
- 88 経済学のトランスフォーメーション vol.7 小林慶一郎・西山圭太、ゲスト：柳川範之
AIの登場で経済学は変わるのか
- 101 「つながり」から経済を読み解くネットワーク科学 vol.8 小林照義・松井暉 
時間発展するネットワーク
- 110 マクロ経済政策評価のための時系列分析 vol.11 新谷元嗣・前橋昂平 
ナラティブ符号制約と識別集合
- 122 白川方明 元日銀総裁に聞く 日本銀行の制度と実務：これまでとこれから vol.3 白川方明・服部孝洋
日銀と大蔵省(財務省)の関係と円の国際化
- 132 海外論文SURVEY vol.147 御子柴みなも
家族に優しい政策は企業にも優しいか?: 出生行動と女性のキャリアの狭間で
- 138 官庁エコノミストが斬る 日本の経済と政策 vol.4 岩上順子
これからの人手不足と賃金の関係を考える

書評

- 142 『金融政策の効果測定』 慶應義塾大学出版会
郡司大志〈著〉 評者：加納隆
- 143 新刊書紹介



- 144 ECONO FORUM

大阪大学社会経済研究所

第29回 社研・森口賞 懸賞論文募集

大阪大学社会経済研究所は、大学院生の経済研究を奨励するため、毎年、「社研・森口賞」を実施しております。1998年に大阪大学名誉教授 森口親司氏の寄付金を基に設けられた歴史ある森口賞へ、本年度も多数の応募を期待いたします。

- 応募資格：2026年1月時点で国内の大学に在籍する、もしくは在籍していた、研究者(国籍不問)、または同時点で海外の大学に在籍する、もしくは在籍していた、日本人研究者。
- 懸賞：受賞者(原則として1名)に奨励金10万円を授与し、受賞論文を社研ディスカッション・ペーパーとして発行する。
- 応募論文の要件(抜粋)：経済学の分野における英語論文であること。
共著論文にあつては、著者全員が応募資格を満たしていること。
- 応募期間：2026年7月1日～7月31日(必着)

第28回社研・森口賞
受賞者・論文名

砂田 啓太 (University of Rochester)

"Optimal Treatment Assignment Rules under Capacity Constraints"

募集要項の詳細：大阪大学社会経済研究所のホームページに掲載

▶▶▶ <https://www.iser.osaka-u.ac.jp/ja/events/moriguchi>



学習院大学 大学院経済学研究科

一般進学者及び社会人向け入試

都心の恵まれた研究環境の中で、基礎的な研究能力をベースにした
現実経済の問題解決力を身につけることができます。

■「研究者養成コース」に加え、社会で活躍する人材教育を目的とした「専修コース」を導入しています。

■筆記試験方式に加え、ERE(経済学検定試験)を利用した入試を導入しています。

※詳細と入試要項(無料)は下記までお問い合わせ下さい。

	博士前期課程		博士後期課程
	一般		社会人 全て
	ERE方式	筆記試験方式	
出願期間	7/14(火)～7/16(木)	7/14(火)～7/16(木)	11/26(木)～11/30(月)
試験日	9/2(水)		2027年2/16(火)
試験科目	書類・EREの成績・面接	書類・筆記・面接	書類・筆記・面接

学習院大学アドミッションセンター

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1 ☎03-5992-1083
<https://www.univ.gakushuin.ac.jp/g-eco/examination/admissions/>

特集

FEATURE

国際学会、はじめの一步を 踏み出すために

国際学会には、世界から研究者が集まってくる。

「自分がそんな舞台に立てるだろうか……」と不安に思うのは当たり前。

でも、いま世界で活躍する研究者たちも、最初は知り合いゼロ！

そんな先達の経験と失敗談から、国際学会デビューのためのTIPSを共有。

普段のコミュニケーションに役立つ情報も満載！

重岡仁

Shigeoka Hitoshi

今井泰佑

Imai Taisuke

黒川博文

Kurokawa Hirofumi

佐々木周作

Sasaki Shusaku

国際コンファレンスの歩き方

～発表準備からネットワーキングまで～



重岡仁 **今井泰佑** **黒川博文** (司会)
Shigeoka Hitoshi Imai Taisuke Kurokawa Hirofumi

世界中から研究者が集う国際学会。「参加すれば憧れのあの研究者に会えるかもしれない」。そんな期待が頭の中で膨らみつつも、「知り合いが誰もいないかも……」「英語での発表や質疑応答は大丈夫だろうか……」「英語で雑談なんてできるのか……」といった不安に襲われ、参加申し込みにも二の足を踏んでしまうこともあるかもしれない。

そんな不安を解消し、国際学会デビューに向けてあなたの背中をそっと押すために、行動経済学会第19回大会（2025年12月12日～14日、早稲田大学にて開催）で企画されたトークセッション「国際コンファレンスの歩き方」の内容から、さまざまな経験談やTIPSを共有。

本特集をきっかけに、ぜひ国際学会への第一歩を踏み出してみよう！



イントロダクション

黒川博文

Kurokawa Hirohumi

関西学院大学経済学部准教授

関西学院大学の黒川です。本日は「国際コンファレンスの歩き方」というテーマで、お二人の講演とQ&Aセッションを行っていきたいと思います。登壇いただくのは、東京大学の重岡仁先生と、大阪大学の今井泰佑先生です。重岡先生は応用ミクロ経済学全般、特に医療経済学の実証分析を、今井先生は実験経済学・行動経済学をご専門とされています。

日本経済学会や行動経済学会のような国内の学会やコンファレンス、あるいはセミナーに参加する場合は、指導教員や同級生、先輩・後輩も参加していて知り合いが多いですよ。また、基本的に発表や質疑応答は日本語で行われますし、雑談なども当然日本語です。言語の障壁がなく、その点でも参加しやすいと思います。

一方で、国際学会や国際コンファレンスとなると、そうはいきません。実際に参加するまでは場の雰囲気が想像できず、研究内容をうまく伝えられるのか、発表を聴いて理解できるのか、他の参加者とどうやってコミュニケーションをとればいいのか……。いろいろと不安に思ってしまう、参加申し込みを諦め

てしまうということもあるのではないのでしょうか。また、意を決して参加したとしても、「あのときこうしておけばよかった……」といった後悔は尽きません。個人的にも、そうした経験はたくさんあります。

そこで今回は、国際的に活躍されている重岡先生と今井先生に、国際学会にどう参加すればよいか、実際に現地でどのように過ごしておられるかをご報告いただき、スキルアップを目指したいと思います。国際コンファレンスでつまづかないように、そこでの歩き方を指南していただきましょう。

それでは、まずは重岡先生からご報告いただきます。よろしくお願いします。



黒川 博文 (くろかわ・ひろふみ)

関西学院大学経済学部准教授

2017年に大阪大学大学院経済学研究科にて博士号を取得。その後、兵庫県立大学国際商経学部准教授などを経て、2023年より現職。

専門は行動経済学であり、*Japanese Economic Review*、*Ecological Economics*、*Journal of Environmental Management*などの学術誌に多数の論文を発表している。著書に『分析者のための行動経済学入門——プロスペクト理論からナッジまで、人間行動を深く網羅的に解明する』(ソシム、2024年)などがある。



気負わず、手の届く目標を立てて、 まずは参加してみよう！

重岡仁 Shigeoka Hitoshi
東京大学公共政策大学院教授

1 はじめに

東京大学の重岡です。よろしくお話しします。黒川さんから、「国際コンファレンスでつまづかないように」というお話がありましたが、私自身がつまづきまくっているの、基本的には失敗談から学んでもらうような形でお話しできればと思います。

黒川さんからは、普段どんなコンファレンスに出ているか、参加に向けてどんな心の準備をするか、ネットワークはどうやってつなげればいいのか、気持ちがへこんだときにどうすればいいか、といった内容をリクエストいただきました。ただ正直に言うと、私も若い頃はこういうことをあまり意識していませんでした。今回は、「今考えればこうしておけばよかった」「タイムマシンに乗って昔に戻れるなら、たぶんこうしていただろう」という視点で、反省も込めてお話しします。

私のバックグラウンドは、経済学者としては少し変わっているかもしれません。もともとは東京大学工学部の出身で、そのまま工学で修士課程も修了しました。当時は燃料電池や太陽電池をつくる研究をしていたのですが、化学実験があまり向いていないような気がしたのと、当時は国連に興味があり、そこからコロンビア大学の国際関係論の修士課程に進学しました。そこではじめて経済学に触れる

機会があり、これはおもしろいと思ってコロンビア大学の経済学博士課程に進学し、博士号を取得しました。博士号取得後はカナダのサイモンフレイザー大学に就職して9年間そこで教え、2021年に東京大学公共政策大学院に移籍し現在に至ります。

こんな感じの経歴で、日本の学部でも大学院でも経済学を学んだことがなく、博士課程が終わった時点で33歳でした。当時のネットワークといえば、日本人研究者では、たまたま同時期にコロンビア大学に留学していた近藤絢子さん（現在は東京大学社会科学研究所教授）など、5人くらいしか知り合いがいまませんでした。

とはいえ、「海外の博士課程に留学しているのだから、現地の研究者とのネットワークはあるのではないか」と思われるかもしれませんが、当時はクラスメイトも前後の学年と比べて極端に少なく、13人しかいませんでした。さらに、その中で実証研究をしている人は4人だけ。研究仲間と言えるのは、日本人と外国人をあわせても10人くらいだったと思います。

それでも、今ではありがたいことにアカデミアの知り合いや研究仲間がたくさんできました。最初は学会に知り合いがないのは当たり前で、後からでも何とかあります。論文のパブリケーションと同じで、最初からパブ

リケーションを持っている人は誰もいません。ゼロから1つずつ、粘り強く積み上げていくしか道はありません。でも、その過程で心が折れることはないかと問われれば、正直、折れまくっています。今でも、重要な学会に参加する際には、開催の1週間くらい前から胃が痛くなるし、飛行機に乗るのも嫌だし、荷造りをしていても楽しくない。でも、実際に現地に着いて知り合いの顔を見たときに、ようやく「ああ、来てよかったな」と思える。毎回、だいたいこんな感じの繰り返しです。

2 どう参加すればよいか？ どんな学会やセミナーに参加しているか？

学会に参加する目的は何でしょうか。もちろん、論文へのコメントは欲しいし、有名な先生と知り合いになれたらうれしい。そういう気持ちは非常によくわかります。ただ、そういうことばかりを考えて学会に行こうとすると、非常に疲れます。後で「結局、誰とも知り合いになれなかった」「この人と話したかったのに話せなかった」と後悔することにもなりやすいです。そのため、あまり高い目標は立てない方が心理的によいと思います。

私が学会に参加する一番の理由は、学会に行って知り合いに会うのが楽しいからです。また、学会に行けば知り合いも増えます。楽しく会話できるし、一緒にコーヒーを飲みに行くのも楽しい。知的な環境でいろいろな人たちと会話ができるというのは、研究者の仕事で一番よいところの1つだと思います。ただ、過度にアグレッシブに行くのは自分としてはしんどいので、適度に交流を持てればよいくらいの気持ちでいます。

とはいえ、もちろん実利的なメリットもあります。学会で知り合った相手がセミナーや



重岡 仁 (しげおか・ひとし)

東京大学公共政策大学院教授

2003年に東京大学大学院工学研究科にて修士号を取得。その後、米コロンビア大学で国際関係論の修士号を取得し、2012年には同大学で経済学の博士号 (Ph.D.) を取得。その後カナダ・サイモンフレーザー大学経済学部に勤務し、2021年より現職。現在は *American Economic Journal: Economic Policy*、*Journal of Health Economics* など査読付国際学術誌の編集委員も務める。2024年には日本経済学会石川賞を受賞。専門は応用ミクロ経済学全般、特に医療経済学で、*American Economic Review*、*American Economic Journal: Applied Economics*、*Management Science*、*Journal of Health Economics* などの学術誌に多数の論文を発表している。

学会に呼んでくれたり、私は「self-invite」と呼んでいるのですが、反対に「東京に行ってみたいんだけどよいセミナーの機会はないか」とメールをくれたりすることがあります。よい研究をしている人からの申し出であれば、断る理由はありません。私自身も、知り合いにself-inviteの連絡をすることはよくあります。また、私自身はあまり経験がないですが、もしかしたら新しい共同研究プロジェクトの話が生まれることもあるかもしれません。でも、「誰と知り合ったら得か」という損得勘定ばかりになると、カンファレンスを楽しめず、むしろ逆効果だと思います。

国際学会に慣れるには、やはり場数を踏むのが一番です。そのために、まずはたくさん参加申し込みや発表の応募をすることです。当たり前ですが、トップジャーナルに論文を出している人は、必ずトップジャーナルに論文を投稿しています。結局は、自分から応募しないと何も始まりません。また、「よい論



場数を踏み、ネットワークを広げ、 プレゼンに慣れる好循環を回そう！

今井泰佑 Imai Taisuke
大阪大学社会経済研究所教授

1 はじめに

大阪大学の今井です。実験経済学や行動経済学を専門に研究しています。私からも、これから国際学会に参加したい若手の方々に向けて、Ph.D.取得直後からポスドク時代にかけて、自分がどのようなことを考え、何をしていたのかを振り返りながらお話しします。

今回のプレゼンテーションを準備するにあたって、自分が過去に参加した学会やワークショップを改めて整理してみました。結論から言うと、メッセージは「とにかく場数を踏むことが重要である」という点に尽きます。身も蓋もない話ですが、先ほど重岡さんもおっしゃっていたとおり、国際学会に慣れるにはとにかく場数を踏むしかありません。そのためには、どこかで最初の一步を踏み出す必要があります。

私は2016年にカリフォルニア工科大学でPh.D.を取得し、その後ポスドクをしながら就職活動をしていました。2020年と2021年は新型コロナウイルス感染症の影響で対面の学会はあまりありませんでしたが、オンラインで参加する機会がありました。振り返ってみると、Ph.D.取得前の2014年と2015年には、ローカルなワークショップやセミナーには参加していたものの、国際学会にはほとんど参加していませんでした。理由としては、もと

もと積極的な性格ではなかったのと、英語への苦手意識があったからなのですが、就職活動をするとなると、そうも言っていられなくなりました。このような強制力が働いて、ようやく国際学会に参加し始めました。そうして何度か参加しているうちに徐々に慣れてきて、楽しめるようになり、どんどん行けるようになりました。

2 主に参加している 国際学会・ワークショップ

私がこれまでに参加してきた国際学会やワークショップは表1の通りです。大規模な学会としては、「American Economic Association」や「Econometric Society」のように、幅広い分野の研究者が集まるものがありますが、学生時代にこれらの学会で発表する機会はありませんでした。大学のあるカリフォルニア州で開催された大会を見に行った程度です。最近になって参加するようになりましたが、ここでの目的は、経済学で現在何が流行っているのかを眺めたり、同窓会的に知り合いに会ったり、海外で活躍している日本人研究者に会ったり、共同研究者と対面で議論することなどです。ただ、非常に規模が大きく、すべてのセッションに出ようとするとなかなか疲れてしまい、最終日にはヘトヘトになり

表1 主に参加している国際学会・ワークショップ

	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20	'21	'22	'23	'24	'25
American Economic Association Econometric Society					✓	✓	✓	✓			✓	✓
Economic Science Association Foundations of Utility and Risk	✓		✓		✓			✓		✓	✓	✓
MAER-Net D-TEA / BRIC / SPUDM その他 [投稿]				✓		✓					✓	✓
その他 [招待 セミナー]			×4	×2	×3	×2		×3	×3	×3	×4	
			×7	×1	×2	×2			×3	×3	×3	×3
				×1	×3	×4	×1	×4	×1	×3	×7	×2

ます。

一方、特定の分野に特化した中規模の学会やワークショップもあります。私の場合は、「Economic Science Association」や「Foundations of Utility and Risk」などに参加しています。これらは分野が絞られているので、自分が積極的に聴きたいと思うセッションが増えます。勉強目的もありますが、それ以上にネットワークを意識して参加することが多いです。

もっと規模の小さいワークショップになると、扱われるトピックはさらに絞られてきます。最近ではメタ分析や意思決定に関するワークショップによく参加しています。この規模になると、ネットワークだけでなく、より踏み込んだディスカッションができます。特に論文にコメントをもらうことを重視する際には、小規模なワークショップやセミナーに参加することが多いです。

実験経済学や行動経済学を専門とする方にとっては、Economic Science Associationはデビュー戦にかなり向いている学会だと思えます。開催頻度が高く、アフリカ、アジア太平洋、ヨーロッパ、インド、北米、世界大会と、年に複数回開催されています。採択率は90%以上と非常に高く、学生や若手の参加者が多いのも特徴です。自分と似た境遇で、同

様のモチベーションを持った参加者が多いので、初めての国際学会でも人脈を築きやすいのではないかと思います。

3 プレゼンテーションでは 目標を適切に設定する

プレゼンテーションでは、どのような学会・セミナーで発表するのかに加えて、自分の目標と、聴衆に期待することを適切に設定する必要があると考えています。

大学の定例セミナーのような場では、60~90分程度の時間が与えられるのが一般的です。この場合は、参加者からフィードバックをもらって論文の質を高めることが主な目的になります。ジョブトークの場合はやや特殊で、自分の研究能力全般をアピールすることが求められます。

一方、学会やワークショップの場合は、発表時間が圧倒的に短くなります。長くても30分、短ければ15分などといったケースもあります。これでは、論文の内容を全部説明するのは不可能です。そのため、私は学会やワークショップでの発表は「きっかけづくり」のためにやるものだと考えて準備することにして、「おもしろそうな研究をしている人がいる」と認識してもらうことが目標です。

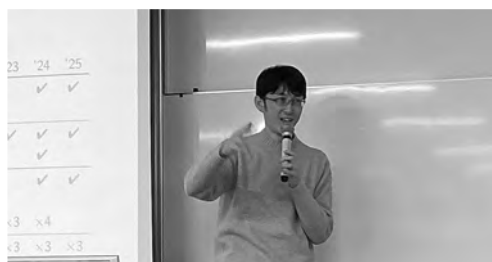
時間が短いので、報告内容にもスライドにも、多くの情報を詰め込まないように気を付けています。発表は、その後のコーヒープレイクや食事の場での会話のネタをつくるためにうまく使えればいいと思います。学会などでのプレゼンテーションは、ネットワーキングの入口でもあるということです。研究に興味を持ってくれた人から将来セミナーに呼んでもらう、あるいは自分から押しかけるきっかけをつくることができれば目標は十分に達成できたと言えます。こうした意識でプレゼンテーションの機会をうまく活用することが大事だと考えています。

4 英語でのプレゼンテーションへの不安

当手を振り返ると、英語でのプレゼンテーションには大きな不安を感じていました。博士課程在学中からポストドク時代にかけては、とにかく発表原稿を書いて覚えるということをしていました。事前に何を話すかを書き、想定される質問とその回答も準備し、とにかく覚える。もちろん、本番ではどうしても想定外のことも起こるため、これ自体が完璧な解決になるわけではないのですが、「これだけ練習した」という自信にはつながりました。

それに加えて、英語の不安を補うために「スライドをいかに効果的に使うか」についても、これまでかなり模索してきました。現在でも、プレゼン資料には図やイラストを多く取り入れるようにしています。自分の言葉だけでは伝わりにくい内容でも、視覚的に示すことで理解を助けることができます。ただし、やりすぎると時間がどんどん溶けていってしまうので、バランスが重要です。

また、実際に目で見て学ぶことも重要です。



今井 泰佑 (いまい・たいすけ)

大阪大学社会経済研究所教授

2009年に東京大学大学院経済学研究科にて修士号を取得後、カリフォルニア工科大学に留学し、2016年に同大学でSocial Scienceの博士号 (Ph.D.) を取得。2017年よりミュンヘン大学経済学部勤務し、同大学Assistant Professor等を経て、2023年より現職。

専門は実験経済学・行動経済学であり、近年はメタサイエンスの研究にも取り組んでいる。これまでに*Nature Human Behaviour* や *American Economic Journal: Microeconomics* などの学術誌に多数の論文を発表している。

自分の専門以外の分野のプレゼンテーションから学べることもかなりあります。私はカリフォルニア工科大学にいたので、神経科学や心理学の研究者の発表を聴く機会もたくさんありました。経済学とはかなりスタイルが異なっていますが、そこから学ぶことも多くありました。いろいろな分野の発表を聴くことで、何がわかりやすく何がわかりにくいのかを知るきっかけにもなるので、自分のプレゼンテーションのスタイルを考えるうえでも有益だと思います。

5 ネットワーキングのコツは「知り合いの知り合い」作戦

国際学会でのネットワーキングの機会は、発表中のQ&A、セッション後のコーヒープレイク、食事の場などいろいろありますし、実は学会後にもあります。私がよくしているのは、セッション中に十分に答えられなかった質問や、その場では理解しきれなかった議論について、後で改めて話をしに行くことで

国際学会にどう参加してきたか？

～場数がものを言い出すまで～

うまく交流できず、発表も思うように伝わらない……。それでも、粘り強く経験を重ねれば、必ず成果はついてくる！
大学院生時代の初参加から最近までの筆者の変化を追いかけてながら、国際学会に慣れていくためのコツをお伝えする。

黒川 博文 Kurokawa Hirofumi

関西学院大学経済学部准教授

1 はじめに

日本国内の学会であれば、同級生や指導教員、知り合いも多く、また言語の障壁もないため、比較的参加しやすい。しかし、国際学会となると、「雰囲気かわからない」だけでなく、「研究内容をうまく伝えられるか」「質疑応答にうまく対応できるか」「他人の研究報告を理解できるか」「どのようにコミュニケーションをとればよいのか」など、さまざまな面で不安を感じる人も多いだろう。特に大学院生や若手研究者（Early Career Researcher）にとっては、国際学会に参加しても「あのとき、ああしておけばよかったのに……」と後悔することも少なくないのではないだろうか。

実際、私自身もその一人である。大学院生の頃から国際学会に参加してはきたものの、うまく交流できず、思うように発表も伝わらず、「もっとこうできたのではないか」と感じる経験を何度も重ねてきた。

こうした問題意識を背景に、私は行動経済

学会第19回大会のプログラム委員として、研究者向け教育セッション「国際コンファレンスの歩き方：発表準備からネットワーキングまで」を企画した。国際的に活躍されている重岡仁先生および今井泰佑先生に、それぞれ「どのように参加し、どのように過ごし、どのようにネットワークを築いてきたのか」「どのように研究報告を行い、どのように機会をつかんできたのか」といった観点からご報告いただいた（同セッションの内容は、本誌（pp.6～22）の巻頭記事を参照）。

もともと、企画段階では1つの懸念もあった。それは、「海外で博士号を取得され、第一線で活躍されている“スーパースター”研

著者紹介

2017年に大阪大学大学院経済学研究科にて博士号を取得。その後、兵庫県立大学国際商経学部准教授などを経て、2023年より現職。

専門は行動経済学であり、*Japanese Economic Review*、*Ecological Economics*、*Journal of Environmental Management*などの学術誌に多数の論文を発表している。著書に『分析者のための行動経済学入門——プロスペクト理論からナッジまで、人間行動を深く網羅的に解明する』（ソシム、2024年）などがある。

国際学会サバイバル記

～猪突猛進編～

海外の舞台で自信をもって発表し、交流できるようになるためには、
どんな努力を重ねていけばよいのか？
失敗や挫折を経験しながら試行錯誤し、
徐々に自分の型をつかんでいくプロセスを通じて学んでみよう。

佐々木 周作 Sasaki Shusaku

大阪大学大学院経済学研究科准教授

1 はじめに

2025年12月から、行動経済学会の会長を務めている。なかでも力を入れているのが、若手の研究活動支援である。具体的には、フィールドTOP誌以上への挑戦を後押しするための実験・調査実施前ワークショップの主催、英語プレゼンテーション練習会の共催、シカゴ大学の実験経済学サマースクールへの協賛と学会員参加枠の獲得など、複数の企画を実行してきた。本誌の巻頭（pp.6～22）に掲載されている学会セッション「国際カンファレンスの歩き方」も、同じ目的意識から黒川博文さんと企画したものだ。こうした支援に情熱を注いでいるのは、自分自身が大学院生だった頃に、「こういう支援があったらよかったのに……」と切実に感じた経験があるからである。

本稿は、筆者自身の国際学会・海外セミナー参加の体験記である。洗練されたノウハウ集ではなく、どちらかというと泥臭い実践の記録だと思う。副題に「猪突猛進編」とつけ

たのは、振り返ってみると自分の海外経験が、計画的というよりは、とにかく目の前のチャンスに飛びついてきた歴史だったからである。成功談だけでなく、挫折や失敗も包み隠さずに書いたつもりなので、若手の方々には「こんな人でも何とかあったのか」という気持ちで、気楽に読んでいただけたらうれしい。

2 修士で飛び出し、博士でつまづく

前提情報として、筆者は国内の大阪大学で博士号を取得している。英語自体は中学・高校の頃からずっと好きだったが、いわゆる典型的な受験英語。読解と英作文は得意だ

著者紹介

1984年生まれ。大阪大学大学院経済学研究科にて、博士号（経済学）を取得。専門は、行動経済学、実験経済学。2025年12月より行動経済学会会長。中央府省庁や地方自治体で有識者委員やアドバイザーなども務める。

三菱東京UFJ銀行（現・三菱UFJ銀行）行員、京都大学大学院経済学研究科、東北学院大学経済学部、大阪大学感染症総合教育研究拠点（CiDER）等を経て、2026年4月より現職。著書に『行動経済学で「未知のワクチン」に向き合う』（共著、2025年、日本評論社）等がある。



なぜ仲介が必要か

1 インTRODクシヨン： なぜ「仲介」を理論で扱うのか

本連載が扱うのは、取引の過程に入り込む仲介者 (intermediaries) ——すなわち「交換プロセスにおける仲介人」の理論である。ここで言う仲介人は、「間に入る主体」を指す。消費財市場の小売・卸、投入財市場の流通業者、資産・耐久財市場のディーラーやマーケットメーカー、そして国際貿易におけるトレーディング・カンパニー、電子商取引を担うプラットフォーマー、不動産業者、マッチメーカー等である。

これらの例の多さに見られるように、現実世界の経済活動における多くの場面で仲介業者が登場する。そうであるにもかかわらず、標準的な理論研究では、仲介がモデルから捨象されている。理由は単純で、仲介を分析するには、仲介機能を生み出す取引摩擦を明示的に書き下ろす基礎モデルが必要になるからである。教科書的な市場モデルは、価格が与えられれば取引が起きると想定しているが、「実際に取引がどのように成立するか」というプロセスをモデル化しないまま残してきた。Rubinstein and Wolinsky (1987) が指摘したのは、まさにこの空白である。

本連載の目的は、取引摩擦を明示した経済学的枠組みで、仲介がどのように現れ、どの条件で「活動的 (active)」になり、厚生にどう影響するかを理解することにある。言い換えれば、市場がそも

そも回るための装置として捉え直し、仲介が、いつ・どこで・なぜ必要になるのかを理論で説明する。

近年の研究は、Rubinstein and Wolinsky (1987) を起点として発展してきた。その基本アイデアはシンプルである。消費者 (買い手) と生産者 (売り手) に加えて、財を生産も消費もしないが、生産者から購買し消費者に販売することに特化した経済主体を導入する。この主体が仲介機能を果たすのは、何らかの比較優位を持つからである。オリジナルの Rubinstein and Wolinsky (1987) では、その比較優位は主に「サーチ (出会い) の優位」、すなわち生産者よりも頻繁に消費者に会えるという点に置かれていた。これが「出会う頻度 (meeting rate)」が仲介の存在理由になる、とい

profile

渡辺 誠 Watanabe Makoto

2006年、エセックス大学にてPh.D. (経済学) を取得。マドリッド・カルロス三世大学准教授、アムステルダム大学 (VU) 経済学部准教授等を経て、2022年より現職。CESifo Instituteリサーチフェロー、キャノングローバル戦略研究所上級研究員、京都府参与も務める。

近著：“Multiproduct Intermediaries,” (共著、*Journal of Political Economy*, 129(2): 421-464, 2021), “Rational Bubbles and Middlemen,” (共著、*Theoretical Economics*, 17(4): 1559-1587, 2022), “Marketmaking Middlemen,” (共著、*RAND Journal of Economics*, 54(1): 83-103, 2023).

成長と衰退の 経済史

Economic History of Growth and Decline

高島正憲

Takashima Masanori

第5回 暴力に担保された成長の芽

1 | いよいよ末法の世に

「むかし、人間にありしとき、斗升^{とます}につけて
わうぼうして、たみをなやまし、あるいは、
あきなひする人をなやまし、うたてがりしもの、
この別所にむまる、このところにおにありて、
ひとつのうつわものもちて、くるがねのたけくおこりたるおきをつみ人にはから
すことやまずしてひさし、くるしみしのぶべ
からず」（『地獄草紙』函量所）

相次ぐ戦乱、飢饉や疫病が頻発した平安時代末期の12世紀につくられた絵巻物『地獄草紙』には、日常的に死や暴力に直面していた当時の人びとが抱いていた不安が、「地獄」というかたちであらわされているが、その1つに「函量所^{かんりょうじょ}」と呼ば

高島正憲 Takashima Masanori

関西学院大学経済学部教授、博士（経済学）

2014年、一橋大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。日本銀行金融研究所アーキスト、一橋大学経済研究所研究員、日本学術振興会特別研究員PD、関西学院大学経済学部専任講師などを経て、2021年より現職。

著作に、『経済成長の日本史：古代から近世の超長期GDP推計 730-1874』（名古屋大学出版会、2017年、第61回日経・経済図書文化賞を受賞）、『賃金の日本史：仕事と暮らしの一五〇〇年』（吉川弘文館、2023年、第39回冲永賞を受賞）などがある。

図1 地獄草紙



注) 計量をごまかした悪徳商人が、獄卒といわれる鬼たちにいつまでも灼熱の鉄の重さを量られ続ける「函量所」の図。『地獄草紙』は伝本によって内容が違うが、奈良国立博物館本には、函量所以外にも、汚いものと清いものとの区別がつかない者が墮ち、糞の穴のなかで虫に体を食われる「屎糞所」、人の物をだまし盗った者が墮ち、獄卒が曳く鉄の臼にその身を磨りつぶされる「鉄磑所」、争いを好んだり生き物をいじめたりした者が墮ち、炎をまとう鶏に体がすたすたになるまで踏まれる「鶏地獄」、人の家に放火した者が、黒雲から降り注ぐ熱い砂の雨に打たれ続ける「黒雲沙地獄」、汚い物を人に食べさせた者が墮ち、膿汁の溜池で最猛勝という虫に食われる「膿血所」、炎を吐く猛獣に追われ、怪獣に身をつつかれる「狐狼地獄」といった恐ろしい地獄絵図が描かれている。

出所) 奈良国立博物館所蔵 (<https://www.narahaku.go.jp/collection/644-0.html>)。

れる地獄がある(図1)。そこでは、生前に偽りの枘や秤をもちいて不当に利益をむさぼった悪徳商人たちが、鬼によって燃え盛る鉄の枘を持たされ、それを量りつづけさせられるという終わりのない責め苦を受けている姿が描かれている。

『地獄草紙』は、その名があらわすように、獄卒といわれる鬼たちから生前の罪に応じた残酷な

経済学の トランスフォーメーション

X-FORMATION
OF
ECONOMICS

小林慶一郎

KOBAYASHI KEIICHIRO

西山圭太

NISHIYAMA KEITA

— ゲスト —

柳川範之

YANAGAWA NORIYUKI



vol. 7

AIの登場で経済学は変わるのか

1 現実を描写する新たな経済学は必要か

西山 まずこれまでの連載の問題意識を簡単に振り返り、その後柳川先生から批判も含めていろいろとコメントをいただきながら、議論したいと思います。

本連載につながる構想を私なりに抱いたのは、2022年のことで、その際に小林さんとともに柳川さんにもお話しさせていただいた記憶があります。勝手にご縁を感じ、今回お招きした次第です。

端的にわれわれの問題意識を言えば、「AI（人工知能）が発達し社会で実装される時代に、これまでの経済学のフレームワークが合わなくなっているのではないか」ということになります。それは、AIが発達したことで「人間の知能の基本に何があるか」についての理解が変わり、その変化の方向が今の経済学の前提と食い違っているか

らです。

現在のAIの基礎は、ニューラルネットワークを模擬したアーキテクチャを使ったディープラーニングという手法を使って、与えられたデータから環境をモデル化し、それに基づいて予測し、誤りがあれば訂正するというプロセスだと思います。簡単に言えば学習が知能の基礎にあります。

他方、経済学に限りませんが、これまでの人間の知能についての理解は、どちらかと言えば「論理的思考ができる」「ルールを使って矛盾なく最適解を選ぶ」ということだったと思います。ダニエル・カーネマン（Daniel Kahneman、1934-2024年）のシステム1とシステム2の対比が端的にそれを表現していると思います。つまり、データから直感的にパターン認識するシステム1は合理的でない判断をするケースが多いので、熟考型・論理型のシステム2がこれを是正する、という図式です。

vol. 3 **日銀と大蔵省(財務省)の関係と
円の国際化**



白川方明 Shirakawa Masaaki

元日本銀行総裁

青山学院大学特別招聘教授、東京大学先端科学技術研究センターフェロー

服部孝洋 Hattori Takahiro

東京大学金融教育研究センター特任准教授

**① 財政政策と金融政策の接点：
国債オペと国債の借換**

服部 今回の、日銀が実施する国債を購入するオペレーション（公開市場操作、オペ）に議論を移していきたいと思います。

白川 1962年に新金融調節方式が導入され、オペの制度が整備されました。ただし、一般会計での国債発行が始まったのは1965年で、日銀による国債オペが始まったのはその後からです。

服部 白川先生のご著書『現代の金融政策』¹⁾で「永続的オペ」として整理されているものですね（永続的オペ、一時的オペの概念図は図表1を参照）。

白川 経済が成長していくときは、趨勢的に銀行券に対する需要が増えます。いわゆる「成長通

貨」です。これに伴う資金（日銀当座預金）の不足に対し、貸出で対応するのは合理的ではありません。なぜなら、貸出で対応すると、貸出という短期の手段を常時ロールオーバーしていく必要があるからです。そのため、「成長通貨」に対しては金融機関から国債を買い切ることによって当座預金を永続的な形で供給することが合理的です。これが「成長通貨オペ」と呼ばれるものです。

この方法をしっかり守る限り、国債買入が事実上の日銀引受になることはなく、合理的で健全なルールだといえます。国債発行開始当時の日銀内部の資料を若い頃に読んだことがありますが、1930年代に当時大蔵大臣であった高橋是清が実施した積極的な財政政策、いわゆる「高橋財政」のもとでの日銀引受がその後のインフレを招いたことへの反省もあり、そうした事態にならないよう

公益社団法人 日本経済研究センター

研究奨励金のご案内

日本経済研究センターでは、経済学・社会学分野の研究や政策に関する実証研究に対し、1968年から長年にわたって奨励金交付事業を行ってきた財団法人日本経済研究奨励財団（2010年6月解散）から引き継いだ寄付金を運用して、経済学・社会学、両分野の研究者に毎年研究奨励金を交付しています。

2026年度は以下の要領で申請を受け付けます。

ホルムズ海峡の
通航を守れ！



対象

- 経済およびそれに関連する学問分野（特に社会学）の研究。現在の重要な経済問題や政策に関する理論的・実証的研究は優先的に選考・採択します。
- 原則として研究期間1、2年見当で一応の成果が期待できるもの。ただし、研究途上やこれから着手するものでもかまいません。また個人研究、共同研究を問いません。
- 同一研究に対し他の奨励金をすでに受けているものでも選考の対象になります。

奨励金額

1件あたり100万円を上限とします。

申請書の受付期間

2026年8月1日～10月31日

発表・奨励金の交付

2027年2月下旬、日本経済新聞紙上に掲載予定、3月末までに交付

研究奨励金 2026年度 審査会委員

(審査会委員長) 武蔵野大学特任教授 福田 慎一

静岡大学 教授 池田 恵子
一橋大学 教授 臼井 恵美子
慶応義塾大学 教授 駒村 康平
大阪大学 特任教授 堂目 卓生

京都大学 名誉教授 成生 達彦
東京大学 名誉教授 西村 清彦
東京経済大学 教授 町村 敬志
中央大学 教授 山田 昌弘

お問い合わせ先



公益社団法人 日本経済研究センター 研究奨励金担当

〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 日本経済新聞社東京本社ビル11階
電話：03-6256-7710 FAX：03-6256-7924 E-mail：jcer_incentive@jcer.or.jp

詳細は <https://www.jcer.or.jp/about-jcer/incentive/> をご覧ください

令和8年度 信託研究奨励金の募集

総額 **1,500万円**

個人は最高 **100万円**、共同研究グループは最高 **110万円**

☆**45歳以下**の個人は、将来性の点で**積極的に評価**します。

応募資格

- 大学の教授、准教授、講師、助教、大学院生、または各種研究機関の研究員等で研究歴等においてこれらに準ずる方。

応募締切日

- 令和8年9月30日（水）（消印有効）

贈呈対象・研究テーマ

- 広く信託に関する法律学的研究、経済学的研究を行う個人または共同研究グループ（これから研究に従事しようとする場合を含みます。）に対して贈呈いたします。
- 信託に関する自由研究と課題研究
課題研究のテーマについては、当協会のウェブサイトをご覧ください。

選考委員

委員長 能見善久氏（東京大学名誉教授）
伊藤元重氏（東京大学名誉教授）
神田秀樹氏（東京大学名誉教授）
木南敦氏（京都大学名誉教授）
柳川範之氏（東京大学教授）
山下純司氏（学習院大学教授）
吉野直行氏（慶應義塾大学名誉教授）
（東京都立大学特任教授）
（五十音順、令和8年4月1日現在）

申請用紙申込・応募先

一般社団法人信託協会
調査部（信託研究奨励金係）
〒100-0005
東京都千代田区丸の内2-2-1 岸本ビル1階
☎03-6206-3987（ダイヤルイン）



- 詳細は当協会のウェブサイトをご覧ください。